

五社（松本神社）

松本神社の場所はかつて「五社」と呼ばれていました。「五社」と「若宮八幡宮」が一緒になって昭和28年から「松本神社」となりました。

◎五社

五社は、藩主戸田家の祖先を祭る神社で、家臣もこれを氏神としました。現在の祭礼は7月10・11日に行われています。祭神が五神であるので五社と呼ばれました。

○祭神

- ・一色兵部少輔義遠（片宮）
- ・戸田弾正左衛門尉宗光（今宮）
- ・松平（戸田）丹波守康長（洪武）
- ・康長夫人（徳川）松姫（淑慎）
- ・松平（戸田）孫六郎永兼（暘谷）



南からみた松本神社

一色兵部少輔義遠は、三河などの守護であった一色義範（義貫）の子で、室町時代に三河国田原の領主でした。その跡を戸田氏の宗光が継ぎました。戸田弾正左衛門尉宗光は正親町三條家の出と伝え、三河国の田原戸田家の祖になった人です。その4代目康長の娘（真喜）は、家康の父である松平広忠の後室になっていて、徳川家とは縁がありました。康光の子が松本に深い戸田氏の祖（二連木戸田氏）になります。

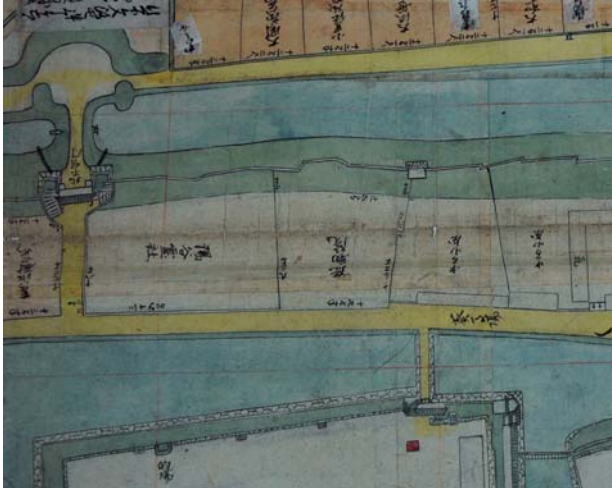
松平（戸田）丹波守康長は、松本に入った戸田氏の最初の人です。父を失い6歳で相続します。このとき徳川家康は松平の称号を与え、さらに自分の生母である伝通院が久松佐渡守俊勝と再婚して生んだ松姫（5歳）を養妹として、康長の許嫁にしました。康長の「康」は元服のとき家康の字をもらって名乗りとしたものです。初め1万石の大名（武蔵国東方）から次第に加増されて、1617（元和3）年松本へ来たときは7万石をもらうまでになっていました。元和9年には3代将軍家光の補佐役も勤めました。1632（寛永9）年に享年71歳で松本で死去しました。家康から松平の称号と葵の紋を使うことを真っ先に許された人です。

康長夫人（徳川）松姫は、すでに触れたように幼少時に康長と結婚しました。康長との間に一男一女を設けますが、24歳の若さで1588（天正19）年に亡くなりました。

松平（戸田）孫六郎永兼は、戸田康長と松姫との間に生まれた長男です。ですから家康の孫のひとりになります。しかし、病を得て父の跡を継げずに40歳で松本で没しました。

○歴史

1633（寛永10）年、戸田家は明石へ転封を命ぜられ移動します。その翌年には、藩主康直が18歳で死去し、光重が跡を継ぐことになりました。光重は1636（寛永13）年に、伯父にあたる永兼の霊をまつため明石城内に社を設け新宮と称しました。新宮は1698（元禄11）年に暘谷霊社と名をかえます。戸田氏が1726（享保11）年再び松本へ入ると、光慈は暘谷霊社を松本に移します。



暘谷霊社・弥勒院（「享保13年秋改松本城下絵図」）

五社の境内には、暘谷社の勧請と同時に、志摩国鳥羽から真言宗弥勒院も移し（十一代心境法印のとき）、社僧として奉仕させ、別当料として30石を給しました。しかし、明治2年の廃仏毀釈によって弥勒院はなくなりました。現在、弥勒院の仏像であった釈迦如来坐像が、安曇野市一日市場の観音堂にあります。

その後、1914（大正3）年、内堀傍にあった若宮を五社の境内にうつしました。このとき西向きだった社殿を南向きに改めました。（旧版『松本市史』は向きをかえたのを1913（大正2）年としている）そして、1953（昭和28）年までは五社と呼びならわしてきました。

境内にいくつかの石灯籠が立っています。享保11年12月、寛政9年5月、天保2年12月の年号が刻まれているものは、それぞれ暘谷霊社移転時、片宮と今宮の遷宮時、洪武・淑慎神の合祀時に、重臣たちが奉獻したものです。また、若宮八幡宮の拝殿前にある盥盤は天和2（1682）年の紀年銘を持ち、境内の石造物のなかでは一番古いものです。



松本神社拝殿



戸田光行は、1797（寛政9）年に三河国田原から片宮と今宮を遷宮して暘谷霊社に合祀します。さらに、戸田光年は1831（天保2）年に洪武と淑慎を合祀しました。ここに五神がそろって「五社」と称するようになりました。

○伝説

暘谷様としてまつられた戸田永兼は、父康長と母松姫の間に生まれた長男であったが、九歳で母を失い、自分も病を得て父の跡を継ぐことができなかった。そして、父に先立って1619（元和5）年6月10日、松本で死去した。父の跡を継いだのは異母弟の^{やすなお}康直であった。康直は、1633（寛永10）年松本から明石へ移った。その3年後、城内の奥御殿に夜な夜な妖怪が現れ、婦女が病むことが続いた。巫女^{みこ}に占わせたところ、松本で亡くなった永兼が崇っているとのことであった。永兼の霊は「自分は東照宮（家康）の門流であるのに、なぜ他の霊と同じ寺に祀られているのか。祠を建てて別に祀ってもらいたい。そうすれば永く戸田の家を護ろう」といったという。そこで、戸田氏の祈願所であった弥勒院内に社を建て、永兼の霊をまつって新宮と呼んだ。

淑慎様としてまつられている松姫に関しても伝承があります。松姫は徳川家康の養妹だったが、容姿がすぐれなかったので婚期が遅れていた。大名たちが集まったとき、家康が「この妹を貰ってくれるものはないか。男子が出生すれば10万石を加増するが」といった。たまたま戸田康長が顔をあげて微笑んだのを見た家康は、康長に松姫を嫁すことにした。ほどなく男児虎松（永兼）が生まれた。家康は虎松を見たいといい、乳母と家臣が付き添って江戸へ上った。ところが虎松は途中で^{ほうそう}疱瘡にかかり死んでしまった。付き添った家臣がそれを報告したとき、家康は「疱瘡ならば顔も変わっていよう。一目会いたいものだ。」と、死去を伏せて別人を立てるようにと謎をかけた。その家臣は正直者であったので謎を読み解くことができず、10万石の加増も立ち消えてしまった。

それを聞いた松姫は、融通のきかなかった家臣に腹を立て、また、もしかすればわが子は病でなく殺害されたのではないかともかんぐって狂乱状態になり、ついには病死してしまった。松姫の^た祟りは後々までもその家臣の家に及んだという。明治になっても、その家のものが五社にかかると祟りがあったと人々が言い伝えた。

また、松姫は器量よしでなかったため夫の康長から相手にされず、世をはかなくて堀に身を投げて亡くなったともいわれた。

松姫の祟りの伝承は現代にも尾を引き、ここでデートをした男女は別れる結末になるなどとまことしやかに言われたりした。

松姫に関する事実は伝承とは異なっています。先に触れたように松姫は5歳で戸田康長の許嫁になり、14歳の時康長の元へ嫁いでいます。けっして美人でなかったために婚期がおくれたわけではありません。2年後には虎^{とらまつ}松（永兼）を生んでいます。けれども、松姫は24歳の若さで亡くなりました。夫の康長が松本へ転封になったのは、松姫が亡くなって29年後ですので、松姫は松本へ来たことはありません。

このように、夫康長から遠ざけられたわけでもなく、お堀に身を投げたわけで

もありません。また、生んだ子の永兼も幼少時に亡くなったのではなく40歳まで生きています。

松姫・永兼の二人に共通することは、松姫は24歳と若くして亡くなっていること、永兼は長男で権力者であった家康の甥にあたるにもかかわらず家をつぐことができなかつたこと、という悲劇的な面があることです。後の人たちは、若くして亡くなった松姫を哀れみ、永兼の無念を思い、またその^{おんねん}怨念を恐れ、鎮魂を願ったのでしょう。そこにさまざまな言い伝えが生まれる素地があったと思われる。

○松本神社の祭礼の幟

祭礼の際に正面に立てられる^{のぼり}幟は、松本が生んだ明治の偉人^{ふくしま やすまさ}福島 安正 大将と文部次官^{つじ}辻 新次 が大正3年に書いたものです。

現在、女鳥羽川以北の20町会が松本神社の氏子になっていて、毎年7月10・11日が祭典日で、大人と子どもの神輿が、氏子の町内を威勢よくまわります。



左：辻 右：福島

◎若宮八幡宮

深志城の築城者と伝える^{しま だち うこん さだなが}島立 右近 貞永 を祭る神社で、大正時代に五社の境内に遷宮されました。

○祭神

- ・島立右近貞永（八幡）
- ・^{おおなむちのみこと}大名持 命（大己貴命とも 神田明神）
- ・^{うがのみたまのみこと}倉稻魂 命（稻荷社）

○歴史

島立^{さだとも}貞知 が父貞永をまつり、城の鎮守としたといわれています。そこに深志を回復し松本と名づけた小笠原^{さだよし}貞慶 が稻荷を合祀したといひます。1670（寛文10）年に、水野^{ただなお}忠直 は社殿の建物を松本市筑摩^{つかま}へ移しました。それは今に伝わって室町時代の様式を残す建築として国指定重要文化財となっています。正徳^{しょうとく}年間に水野^{ただちか}忠周 は神田明神の分霊を若宮八幡に勧請しました。



若宮八幡宮の拝殿



松本市筑摩三才にある

若宮八幡宮の社殿（国重文）

文政 8 年 8 月、戸田^{みつつら}光年 の時に吉田家（唯一^{ゆいいつ}神道^{しんとう}流の宗家）より若宮八幡の社号を許されました。藩主からは毎年粃 9 石が供えられていたといひます。

もともとの社殿は現在の埋の橋の北（島状になっているところ）にありましたが、1914（大正3）年9月に五社の境内へ遷宮されました（旧版『松本市史』）。神殿は宝曆^{ほうれき}年間（1751～1764）の建築といひ、水野氏時代の建物です。

○伝説

小笠原^{ながむね}長棟 の夫人の海野^{うんの}氏は子がなかつたので、林城の稲荷に祈ったところ長時^{ながとき}を授かった。それにちなみ長時の子の貞慶が稲荷をまつたといひ。